

## ドーンデーンケ村雑記

水野浩一

### 1 再び現地へ

1965年11月1日、予定どおり日本を立ち、バンコクに到着した。しかし、その後準備と旅行のために2カ月費やしたので、ドーンデーンケ村にふたたび足を踏み入れたのは、結局1月4日のことであった。

コーンケーンの町に来てみてまず驚いたことは各種の公共施設が実際に機能しはじめていること、車の数が多くなったこと、商店の移転・改造・新築工事が目だつこと、また飲食店の食器類がきれいになっていることなどである。サラブリからコーラートとコーンケーンを経てノンケカーイに到るハイウェイが昨年開通したのをはじめ、今年もコーンケーンからガーラシンまでのアスファルト舗装工事が完成されたし、その他、ナムポーンダム開設、コーンケーン送電中継所、55キロワット放送局、農業センター、保健・衛生

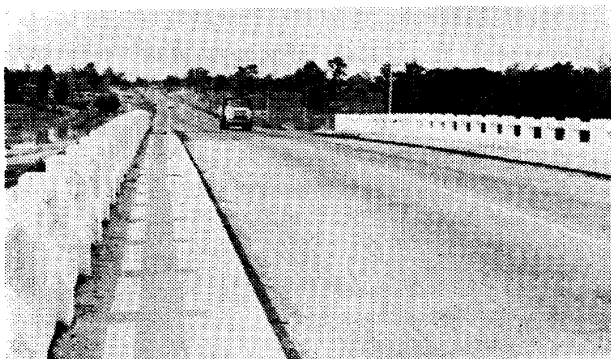


写真1 ハイウェイ、コーンケーンからタープラへの途上

管理センター、診療所員養成学校、コーンケーン大学、技術専門学校などの落成祝賀式があいつぐ。さらに交通網の発達にはガーラシンやマハーサーラカムの農産物をコーンケーンに運ぶ。「コーンケーンを東北の中心都市に」という構想もまさに実現近しの感をいしている。こうした町の発展ぶりは村人の心にも刻まれ、「ウボンもウドーンもコーンケーンに勝ることなし」と噂される。

1月4日はちょうど月始めにあたるので、郡下の全ガムナン(郡より低い行政区域タムボンの長)と村長が郡役所のホールに集まることになっている。郡側からは郡長をはじめ、副郡長、また米穀課、農業課、畜産課、厚生課、村落開発課の長が出席する。集会の主要目的は役所からの命令・情報をガムナンと村長に伝えることにある。毎年年初めのこの日、ガムナンと村長の職務遂行能力のテストが行なわれる。質問文の例を挙げると、つぎのごとくである。「村の大人はすべて政府発行の身分証明書を所持しなければならないが、現在17才に達した者は申請する必要があるか。」「商いのために牛を5頭以上10頭まで飼育する場合、郡役所に届出、税を収めねばならない。許可なく飼育した者には100パーツ以下の料金が課せられる。正否を問う。」「輸出農産物に該当するものを問う。とうもろこし。ひま。パパイヤ。ケナフ。ジュート。」「土地所有者は税金納入のために調べて報告する義務がある。」

会場にはガムナン・ディーや村長プー・ヤイ・ブッディーの懐しい顔も見える。ただ村落開発作業員の顔ぶれは新しくなっていた。郡下には約30人の開発作業員が派遣されており、それぞれ受持の村を担当することになっている。その受持範囲はだいたい10村、1,000戸位であり、月の半分以上を村人との接触のために費やす。道路拡張、井戸や給水タンクの設置、衛生改善、生活水準の向上、集団討議の指導など開発局の計画を現地で押し進める役割をもつ。作業員は中央出身の者、地方出身の者、また大学出身の者、教員出身の者、ウボンの教育センター出身の者とさまざまであるが、最も重要なことは各人の気持であり、村人との接

触態度である。同じ仕事をし、計画を進めても、マイナスの結果を生じうる。村人は「チャイ・ヤイ」を好み、「チャイ・ノイ」を嫌う。チャイ・ヤイとは「大きな心」を意味するが、具体的にいうと、たとえ地位が高くとも、それを傘に着て人に命令したり、自分の方が優れていると思ったり、人を軽蔑したりせず、なにごとにも寛容で、心が大きく、酒を飲んでも人を罵しらず、なにごとにも分かち合うような人を形容する言葉である。「チャイ・ヤイ」を持つ作業員はつねに成功するし、村人から尊敬されるが、「チャイ・ノイ」を持つ作業員はたとえ開発計画を履行しても、村人から嫌われる。

集会の後、村長プーヤイ・ブッディーと作業員とともにドーンデーン村に向かった。ハイウェイをタープラから東に折れると、道端はケナフを洗浄する農夫で一杯である。夕方、村に着くと、会う人ごとに「いつ来た」「噂には聞いていたが、どうしてんだ」「子供は大きくなったかね」「いつも懐しく思ってた」「写真を見ていたが、ものを言わなかった」などという。



写真2 ケナフ洗浄作業、水洗いのため皮をむく村人

なかには、日本へ行った夢をみたが、水ばかりで帰って来たという者もある。どれも待ちかね、再会を歓ぶ言葉ばかりだった。これでも調査には支障なしと一安心だったが「お前のことを思っていたが、お前はどうかだったかね」などと問われるとこちらが恥ずかしくなるくらいである。

昨年世話になった校長の家は作業員が宿をとっているの、今年、町から毎日かように決めた。そして今は県の村落開発課長とともに家を借りてコーンケーンに住んでいる。昨年帰国に際して、友人の家に預

けておいたオートバイもすこし修理すれば使えるし、通訳もまた比較的簡単に昨年の人をみつかることができた。

## 2 耕作・田植

人類学的な調査にとって1年を通じて現地に滞在できることはまことにありがたい。第1回目の調査の時は水田作業について観察する機会がほとんどなかったし、水田耕作と雨の状態も理解しにくかった。稲作農村である以上、5月、6月、7月はどうしてもみなければならぬ。

さいわい今年、雨が順調に降りはじめた。5月9日から20日までは1日おき位に午後4時半頃から約1時間降る。降り方はそれほど激しくはない。夜も降ることもあるが、朝8時頃にはあがり、あとは曇がちの空模様となる。温度は25~27°C位で快適である。この雨で田に水が溜りはじめ、村の中でも早いところは苗代にもみ種をまきはじめた。田植をした家が1軒あったが、これは例外である。

5月21日から27日までは晴天が少なく、1日のうち雨の降る時間が多くなる。南西風の影響であることはあきらかである。朝起きるとたいてい雨だから、また降りかと落胆させられる。それでも9時、10時頃になると小雨になるから村までオートバイを走らせる。町で降っていないくとも、ラム・チーの橋を渡るあたりはいつも降っているし、村に着くと降っていたり、止んでいたりするから、場所により差がある。1日のうち30分ないし1時間位激しい降りがある。この雨で村のどの家も苗代作りを終えてしまい、田に水が溜るごとに、1枚ずつ第1回目の耕起をする。田の中には新芽の出た草が5~6センチのび、雨水が3~4センチ位たまる。耕せば草は枯れてしまう。ただし、ラム・チー川の氾濫をこうむる田には水草が繁茂しやすく、耕起直後1回だけ除草する。

5月28日から後はしだいに元の天候にもどり、晴天が多くなり、気温も32°C位に上昇する。6月中は15日位雨の日があった。しかし降っても短時間で、外出には困らない。農夫は雨が降ると田に出かけ、晴れるとケナフの除草に余念がない。5月末にまいた種は20日もすると40センチ位に成長するから、6月の中旬を過ぎると、どの農家も田植を始める。道路は雨降りの翌日だとところどころ水溜りができるが、すぐ乾いて

しまう。乾期には乾ききった田のあぜをオートバイで往来できたが、今は不可能である。

水田はノーンとよばれるくぼ地、ないしゆるやかな傾斜をもつ起伏の谷間に発達している。出小屋はちょうど起伏の背と谷の中腹に設けられ、どんなに雨が降っても水の危険がないようになっている。出小屋より高いところには早稲を、近いところには中稲を、低いところには晩稲を植える。苗代は沼池のほとり、もしくは出小屋のすぐ近くに作られる。

雨が降り出すと、田のあぜを修理し、上手を開いて、より高いところに降った雨水が流れこむようにする。耕起は2回行ない、そのあとまぐわで水平に搔きならす。もみ種をまくと、根がつくまで、水をおとす。6日位で根がつき、20日もすると田植ができるほどに成長する。苗は注意深く引抜くが、ともすると根や葉の切れる音がする。一束位になると、足にたたきつけて泥を落とし、束ねて、水でゆすぎ、葉の先端を切って植付けにそなえる。葉先を落すのは植えた時に、葉がたれて水につかるのを防ぐためだという。

苗代と田の耕作は同じ仕方である。まず雨で土がやわらかくなったとき、第1回目の耕起をしておく。まず外側を右廻りで2～3回犁く。ついで長辺を耕すが、端まできたとき、右にまわって反対側の長辺にうつる。その間犁はあそんでいる。中央の線までくれば終りである。第2回目の耕起は田植直前に行なう。その仕方は第1回目とは逆に、中央から始めて、外周を耕して終る。これがすむとすぐ、まぐわで搔きならす。この場合水牛の使い方は第2回目の耕起と同じ順序である。

田植のときは植えながら後退する。用意した苗を1束左手で持ち、右手で3～4本ひきぬいて、根本をそ

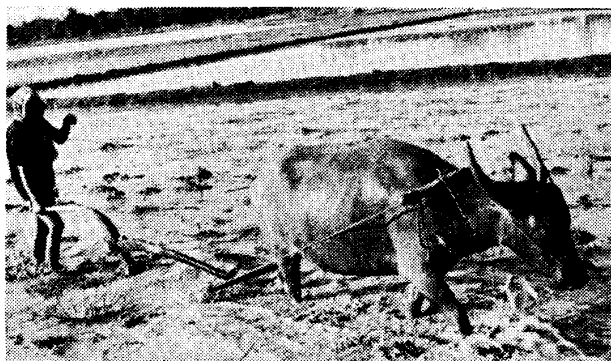


写真3 第2回目の耕起、犁の木部は自家製



写真4 田植、正三角形の頂点に植えられた稲

ろえ、泥の中に押しこむ。深さは親指一杯である。植える人は立ったまま手のとどく範囲内の直線上に5カ所植える。おわると後退して、前列とはたがいちがいになるように植えていく。したがって、植え終ると、片ひじ間隔の正三角形がいくつもでき、その各頂点に苗が並ぶ。

苗は6日位で根がつき成長する。その後、田の除草は行なわない。水の調節としては、適当な水位になるように、水を流すことに努力が向けられる。もし収穫期まで雨が降らないと、枯れてはしまわぬが、成長せず、植えたときとほとんど同じ背丈で穂がつく。これだと4反で石油かんに一杯位しかとれない。それでも刈入れしなければならぬ年がしばしばある。早稲は10月中稲は11月、晩稲は12月頃に収穫する。10月頃は水が一番多くなるから、早稲は出小屋より高いところに植える。

### 3 天候と生活水準

稲刈で忙しくなるのは12月である。2回の調査期間中、不幸にして一度も刈入らしい刈入風景にぶつからなかった。ここ3、4年間旱ばつと洪水による不作が連続している。町で買う米の値段は昨年100キロ140パーツ位だったのが今年は230パーツもする。ケナフの売上金はほとんど米代にあてなければならない。不足な

らば今まで飼っていた馬、牛、はては水牛を売りはらってやりくりすることもまれではない。不作だとわかれば、あひるを飼い、ゴザを編み、あるいは魚捕に懸命になる。ときには賃金労働にも出なければならぬ。借金もよぎなくされる。

村人が困って金を調達する場合、4種の方法がある。第1は「カーイ・スワン・ポー・キオ」つまり青田売であり、ケナフがある程度成長すると、成熟しないうちに売り払ってしまう。第2は「アウ・グァン・サイ・ポー・キオ」といい、売上金をさきにもらう。収穫が終われば100キロ分のケナフを持ってくるから、前払してくれとたのむ。キロ当りの値段はとうぜん約束した月によってことなる。第3は「アウ・カウサーン・チャムラ・ポー・キオ」といい、第2の方法と類似しているが、金の代りに米で借りる。第4は借金である。100パーツにつき10カ月で50パーツの利子計算になる。村内では10カ月を単位とし、町では1カ月単位である。

どの方法を使用するかは所によりことなり第1、第2の方法を主とする地方もあるが、この村では予想に反して第4の方法がとられている。第1、第2はごくまれであり、第3の方法は全くない。1年の借金額は1軒につき平均して200~400パーツ位で、500パーツ以上、1,000パーツもの金額になるという例をみない。今年は村の約50%が金を借りねばならぬ状態になっている。村内の資金は約6,000パーツ位だから、他はター・プラのケナフ商や米屋に依存することになる。

町の商人は利子のためというよりは、むしろケナフ買上げの場を獲得維持する手段として、村人に金を貸付け、村人はいつでも困れば金が借れるから、特定の店にケナフを売る。1週間位で収穫が終わるといような場合は利子なしで、金を貸す。また返還の可能性がなければ貸さぬし、まして借金のために、村人が土地を失うという例は全くない。村人たちが町の商人をどのようにみているかと思い、間接的な質問を試みた。コン・ルエイといえば町の金持を指すが、「コン・ルエイは一般にけちで利己的か、それとも同情のある態度を示すか。」その結果は、「メーター・ガルナー（慈愛・同情）」と答えたもの39人、「けちで利己的だがメーター・ガルナーでもある」と答えたもの8人、「けちで利己的」と答えたもの10人であった。多くの場合、村人の商人に対する態度は反感的でなく、

友好的であることが推測されうる。

村内の資金のうち2,000パーツは村の金であり、他の約4,000パーツは村内の3名のものの金である。1人はトラックの所有者で、田畑の面積は50ライ、他の1人は精米所の所有者で、田畑の面積は15ライ、もう1人は洋裁をし、田畑はなく妻の両親と共にくらす。3人とも金貸業を専門にしているのではなく、比較的金の融通のきく者という性格が強い。他方借金している者の分布をみると、所有反別のどの層にも一様にみいだされる。借金の状態はその家の経済状態を表わしているが、それは単に田畑の所有面積とそれほどはつきりした連関はなく、むしろ他の多くの要因、たとえば家族員数、田畑の質、その他の収入源などとも関連しているらしい。したがってすくなくとも田畑の面積が大であるから経済的に豊かだとは一概にいいきれない状態にある。

田畑の所有面積に差がないわけではない。平均8町、多いものは24町ももつ。しかしその差は、この地特有の不順な天候、灌漑施設のない完全に自然依存型の稲作形態のためにかかなり水平化されるものと考えられる。この点、比較的天候に恵まれ、灌漑施設もとのったところとは土地所有規模のもつ意味がかなり異なるであろう。階層を取扱う場合もこうした特色を十分考慮すべきである。

#### 4 親戚のつながり

調査期間中、村の人とは誰かれの区別なく一様につきあう必要がある。一部の人とのみ接触することはよくない。それでも振返ってみて、一番親しくしたと思う家はあるものだ。今年83才を迎える最年長者ポー・ヤイ・チャン・ナム、60才を超えたポー・ヤイ・ルン、ポー・ヤイ・ハーン、ポー・ヤイ・サン、また50才を大分過ぎたポー・テーン、ポー・プットとポー・トゥン、それから42才のナーイ・ケーン、30才代のナーイ・トンマー、ナーイ・ペンタとナーイ・パンなどの家や出小屋には比較的良好に出かけた。

最初に知り合ったのはポー・ヤイ・ルンである。ポーは父、ヤイは大きいの意味で、尊敬すべき年長者に付す敬称であり、また呼びかけの言葉である。ルンが名前である。姓はマハーチャイというが、日常は名を使う習わしである。田畑の所有面積も多く、馬を飼育するほどだから、経済的にも比較めぐまれている。そ

れと同時に熱心な仏教徒として、また祈祷師として尊敬されている。ポー・ヤイ・ハーンも同じような地位にあり、ポー・ヤイ・ルンの友人であるとともに、お互の妻を通じて親戚関係にあるこの2人が村のナチュラル・リーダーであり、同行してもらえば村人の信用をうることができる。

ついで覚えた人はポー・ヤイ・サン、かつて村長を一年勤めたことのある人で、今は息子夫婦に田畑を耕させ、自分は小さな精米所の番をしている。ポー・ヤイ・ルンは「自分とポー・ヤイ・サンとはパム・クイー」だと教えてくれた。パム・クイーとは妻同志が姉妹関係にある男達間の関係を指す。パム・クイーは若いあいだは田畑作業をともにし、連立って魚をとりに行き、あるいは薪取りに出かけるなど、日常生活をともにすることが多い。お互の仕事ぶりで、また財産分けで争いが無いわけではないが、一般には仲よくみえるし、またそうあるべきことが期待されている。パム・クイーという言葉があるにもかかわらず、それと反対の関係を示す言葉、すなわち夫同志が兄弟関係にある女達の間を指す用語はない。

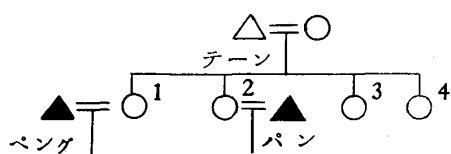


図1 パム・クイー

パム・クイーに気をひかれていたうちに、目についたのが、ナーイ・ペンゲとナーイ・パンである。この2人はその妻、妻の妹2人と合せて6人で、稲刈りをしたあとの水溜でケナフの洗滌をしているところだった。妻の父は沼へ魚釣りに出かけ、母が孫を守って家で留守番をしているという。村ではどんなときでも年令秩序が重視される。ここでも、パム・クイーの兄の方であるナーイ・ペンゲが現場の指揮者であり、作業の段どりを進める。ナーイ・ペンゲにとって妻の妹3人はナーイであり、かれは妹達にとってルンゲの関係にあたる。親族名称においてルンゲはナーイよりも年長者であり、後者は前者に従うべきものとされている。ルンゲは普通父母の兄、ナーイは母の妹と弟を指す。上の

ように同世代においてもルンゲとナーイが使用されるのは、子供からみた関係を使う習わしになっているからである。相互の呼びかけの言葉に注目してみると、ナーイ・ペンゲは妻をメー・ブンチャンと呼ぶ。つまりブンチャンという初子の子の母という意味なのだ。妻の妹はナーイと呼び、妻の妹の夫はナ・パウと呼びかけている。反対に妻の妹達はナーイ・ペンゲをルンゲもしくはピーー・アーイと呼びかける。

田から村に帰ってくると、ポー・ヤイ・ルンが「どこへ行って来た」と問う。これは日常使う挨拶がわりの言葉である。そしていろいろと親戚関係のつながりを教えてくれた。ナーイ・ペンゲの妻の母の母とポー・ヤイ・ルンの妻の父とは姉弟の関係にある。そしてナーイ・ペンゲの妻の母の夫がポー・テーンであると説明してくれた。ポー・テーンなら、よく知っている。かれはポー・ヤイ・ルンとともに寺の総代で、いつも村人を先導して戒律を乞う。はじめてこの村に来たとき、村人がスーグ・クワンをしてくれたことがあった。そのとき呪文をと覚えてくれたのはポー・ヤイ・チャン・ナム（チャンは出家中に村人から愛されたことを示す尊称）である。この人の妻の母とポー・ヤイ・ルンの妻の父とは姉弟の関係にあたる。またスーグ・クワンのとき横に坐った娘の父はポー・トゥンといひやはり祈祷師であるが、かれの妻の母の母とポー・ヤイ・ルンの妻の父とは姉弟の関係にある。

調査する場合、各年令層を代表する適当な人をあらかじめ気をつけておく必要がある。ナーイ・ケーンは若いだが、慣習をよく知っており、これから子供達を結婚させようとする年令層を代表する。これに反してナーイ・トンマーはすでに子供があるが、また妻の両親の田畑で働いているから、ナーイ・ケーンより少し下の年令層を代表する。したがって娘婿と妻の両親の関係がよく観察しうるはずである。ナーイ・トンマーの妻の母とポー・ヤイ・ルンの妻とは姉妹であり、ナーイ・ケーンはポー・ヤイ・ハーンの子である。

村では「シップ・フー・ボ・トオ・コーイ、シップ・ルグ・クイー・ボ・トオ・ポー・タウ」という格言がある。ルグ・クイーとは娘婿、ポー・タウとは妻の父である。この格言は、知識のみでは不十分で、経験が大切だと教えるのに妻の父をひきあいに出し、10人の娘婿もこれにはかなわぬと誰もが納得する事実を挙げている。男として生まれればすべて娘婿になる。

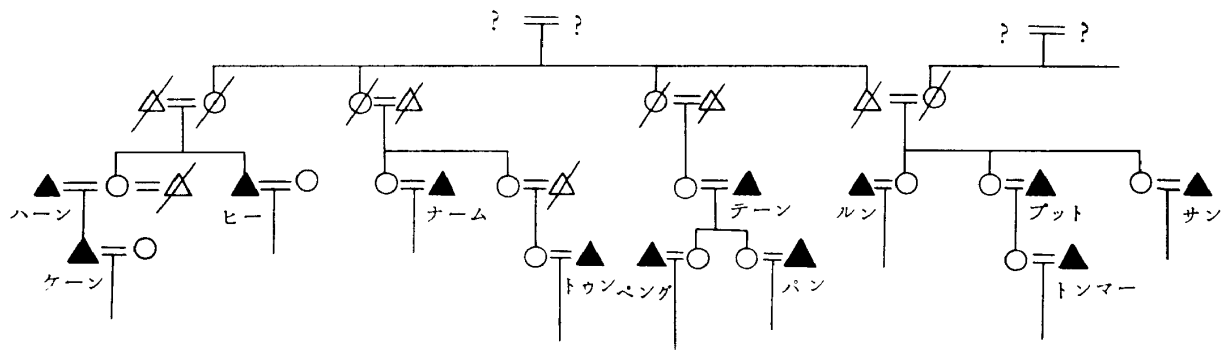


図2 村の男達のつながり

娘を愛するばかりでなく、その父母を、そして水牛や田畑をも愛するにいたる。妻の父母と家のために働き、批難されぬように、どんな仕事にも精を出さなければならない。妻の父との間にはいさかいは少ない。あるとすれば妻の母との間であり、別離の原因の一つでもある。

以上よくつきあったと思う人々をつなぎ合わせてみると図2のようになる。知りあいになった男達はすべて、その妻ないし母を通じてたがいにつながっている。図上の第1世代は父母とともに、もしくは兄弟姉妹とともに、2回にわたって70年前マハーサーラカムより当村に移住してきた人々である。

### 5 村の子供達

村の子供はごく自然に育ち、どの子も快活である。相手になると笑うし、学校帰りに会うと、立止って礼をしていく。服は破れていたり、ボタンがとれていたりすることがしばしばであるけれども、比較的清潔な感じで、健康的である。

村の南に4年制の小学校があり、4村が通学区域となっている。学童は約230人、各年とも男女1クラスずつ、先生が8人いる。出席率もわりによい。しかし家に帰ると家の手助けで忙しい。水牛の放牧が主な仕事である。一体どういう気持で毎日放牧に出かけるのかと思い、簡単な質問項目を10ばかりプリントして59人に配布した。この点、大人たちより調査しやすい。書いてくれた子には鉛筆を3本やるつもりだった。しかし考えなおして2本にし、残りは全員に配ることにした。「池の蓮は傷つけるな、泥はにごすな」という諺があるごとく、この村では誰もが失望しないように振舞うのが賢明なやりかたとされている。

学校は9時には始まり3時15分に終る。朝食をすませると8時半頃には登校し、授業が始まるまで4～5人ずつ集って遊んでいる。11時に朝の時間が終わると、ほとんどが帰宅して昼食をする。家の人の食事はたいてい午後2時頃であるから、自分で適当に出してきて食べ終わる。放課後、家に帰ると服を着かえる。掃除をする者もある。空腹ならばソム・タム（青いパイヤを千切りにし唐辛と魚醬をませた食物）でも口にして、すぐ手伝いをはじめる。まず男女ともほとんどが水汲みをする（51人）。それから水牛、牛を連れにもどる（50人）。女の子はまた弟や妹の守もする（24人）。遊んだと答えたものは全員のうち4人にすぎない。子供達にとって、家の手伝いは必ずしも楽しい



写真5 ワイ・クルー式のあと、徳をわかつ学童

ものではない。ときには両親に叱られて、しかたなく出かけることもあるが、出かけてしまえば仲間も一緒だし、放牧も楽しい。男の子25人のうち「怠屈だ」と答えた者は1名、「なんとも感じぬ」と答えた者は1名にすぎない。女の子にとって放牧は男の子の場合よりもつらい。「つらい、怠屈だ」と答えたもの20人、「楽しい」と答えたものは14人だった。

男の子にしても、女の子にしても、仲間と一緒にだという意識が仕事を楽しく感ぜしめ、親を助ける態度を形成する上で役立っている。小学校に入ると、一日の生活のうちで、父や母と共にいる時間よりも、仲間と過ごす時間の方が多くなる。そして「友達と一緒にいる時が一番楽しい」と感じるようになり、「父母または祖父母と一緒にいる時が楽しい」と答えた者は59名中わずか3名にすぎない。

子供達が最も尊敬し、またおそれる人は先生と親である。59名中、35人は「先生」と答え、34人は両親と答えている。家庭教育において親が果たす役割は主として農事と家事である。きかぬ子には叱りつけるが、ときには竹の棒でたたくこともあるらしい。59人中54人は「ときどきたたかれる」2人は「しばしば」と答え、「たたかれたことがない」と答えた者は3名にすぎない。

子供達は自分に関連して外で起った事柄を家に帰ってから両親に話しする。その程度は、「必ず」と答えたもの15人、「ときには」と答えた者が44人である。しかし、子供達はその日の出来事を種にして親たちと話し合ったり、また両親と子供たちが団欒する風景はあまりみかけない。子供達は大人が雑談しているのを側でだまって聞いていてもよいが、話にはくわわらない。また親は子供にいろいろと農事について言い聞かせるが、子供が口を開くことは少ない。親には絶対さからうべきでないことが期待され、いやなことでも黙って聞いているか、さもなければ聞き流してしまう。

道徳的な教育にかんしては、家庭で特に教えるということはない。知識として身につけるのは学校においてであり、行動として身につけるのは日常の生活慣習を通じてである。ことにタムブン・タムターン(善根を積む行為)の諸活動を見習うことによって、ごく自然に学びとられるようである。小学生も3,4年となれば、「天国と地獄の存在」を信じるようになり(52

名)、明確な態度をもたぬ者は7名にすぎない。そして59名中、52名は行為の善悪の結果を最も「おそれるもの」の一つとして感じとっている。同時に、社会生活においても、「メーター・ガルナー」すなわち慈愛に満ちた行為を理想的人格の特質とし、「恩を忘れてはならぬ」ことの判断が可能となる。

卒業するときの子供たちの態度は積極的である。すなわち、59人中17人は「できれば進学したい」と答え、39人は「卒業すれば、さらに両親を助けることが出来るから嬉しい」と答え、単に「勉強しなくてもよいから嬉しい」と答えたものは3名にすぎない。しかし、実際に進学しうるものはほとんどなく、多い年で6~7名、ない年の方が多い。親は子供たちが農事の手助けをすることを望まざるをえないからである。卒業後は農事、家事の見習い、そして放牧の生活が長い間つづく。この時代はまた方々の催しに出かけることの出来る楽しい時でもある。20才になって出家の式を終えれば、そろそろ身を固めねばならない。「独身は楽しいが、寂しい。結婚すれば楽しみも増えるが、苦勞しなければならぬ。」とナーイ・ケーンは呟く。

## 6 爆竹祈願祭

毎年きまって行なわれる年中行事には伝統的な物の考え方や価値観が表現されるから、どこかで催しがあると、なにをおいても出かけなければならない。村の中できめて行なう行事はなにごとにも「そのつど主義」なので、よほどしっかりたしかめておかないと機会を失することになりやすい。

村人に関連のある行事・祭典・祝日を順を追って列挙すればつぎのごとくである。1月1日は新年(公休日);1月8日は子供の日(第2土曜,学校休日);旧3月中(1月22日~2月19日)には村の除穢儀礼祭,ならびに稲魂招来儀礼;旧4月中(2月20日~3月21日)にはチャータカ誕生祭;旧4月上弦の15日(3月6日)は万仏節(公休日),カウ・チー奉獻祭;4月6日はチャークリー記念日(公休日);4月13日は灌水祭(公休日);旧6月中(4月20日~5月19日)には爆竹祈願祭と田の神祭;5月5日は国王即位記念日(公休日);旧6月下弦8日(5月13日)は春耕祭(公休日);6月2日はワイ・クルー(第1木曜);旧7月上弦15日(6月3日)は仏誕節(公休日);旧7月中(5月20日~6月17日)には田植祭;旧第2回目

の8月上弦15日（8月1日）はアシャダ祭（公休日）；翌日（8月2日）は入安居（公休日）；8月12日は王妃誕生日（公休日）；旧9月下弦の1日から10月上弦の15日（9月1日～9月27日）の間には稲魂供養祭；旧10月上弦の15日（9月29日）はカウ・サグ奉獻祭；10月23日はチュラーロンコーン大王祭（公休日）；旧11月上弦の15日（10月29日）は出安居；その後1月間の間にはガチン奉獻祭；旧12月上弦の15日（11月27日）はローイ・ガトンガ祭；その後1月間の間にはパー・パー奉獻祭；12月5日は国王誕生日（公休日）；12月10日は憲法記念日；旧1月（11月28日～12月27日）には刈入祭；旧2月と3月の間には家々の除祓儀礼祭がある。

村では年令を12支で覚えていることが多い。今年は午年にあたるが、その変り目は陰暦6月上弦の第1日、新暦でいえば4月20日であった。旧6月から年が変る。ちょうど乾期が終り、草木が青々としはじめ、稲作の時期を告げる折目である。

ボンゲ・ファイすなわち爆竹祈願祭は旧6月に行なわれる。ボンゲは皇竹 (*Bambusa Tulda*) ファイは火の意味である。7～8メートルもある竹を切り出し、根元に木炭の粉末、樟腦と火薬を混ぜて装填し、空高く打ち上げる。方々の村から集められたボンゲ・ファイは、一つずつ打ち上げ、その手腕を競う。根元すなわち先端には龍の飾がとりつけられる。雨が順調に降り、田畑の作物がよく成長するようにと祈をこめて、村のブ・バーンないしテーワダー(村の守護神)を供養する。したがって一種の雨乞祭ないし農業祭である。

また一説には、この月は仏誕節にあたるために、仏に劫火を奉獻するともいわれる。その場合、ボンゲ・ファイは欲望、憎悪、無知をあらわし、火をつけて煩惱を焼き消してしまうことに意味がある。6月に行なう献納祭であるから、ブン・ドアン・ホッグとも呼ばれる。

前日はワン・ホームといい、村人達は朝から御馳走の準備をする。カウ・プンゲ（米の粉でつくったそうめん）、カウ・トム（糯米をバナナの葉に包み、中にバナナを入れて蒸した菓子）、カウ・モッグ（糯米の粉をねって蒸し、中に椰子の果肉を入れた菓子）、それにラーブ（水牛や牛の肉をミンチにし、唐辛、魚醬を入れて味つけた料理）などがある。他の村から来

た者は、それぞれ知人を求めて空腹を満たし、あるいは休息する。特に形式的な接待はなく、客は来た順にでんでに御馳走になる。このような関係にある間柄をサーマキー・ガンといい、他の村に行くときは必ず、このようなルートを求める習わしである。もし自分のサーマキーがなければ、ある者と一緒に出かける。

午後3時頃になると、各村からボンゲ・ファイが集まってくる。寺の境内からブ・バーンに参り、その後村中をねり歩く。ボンゲ・ファイは肩に担いだり、牛車にのせる。この日は僧侶も別に加わり、住職はそれぞれのボンゲ・ファイを先導する。そのそばを若者達が踊りながら、見物人を楽しませる。道端は人々で一杯になる。夜は境内で映画やモー・ラムがあり、村人にとってはかぎりなく楽しい日である。

翌朝は朝7時頃から寺に出かけ、僧侶に食物を献げて善根を積む。つづいてボンゲ・ファイが広場にもち出され、順次点火する。まず大きな木をえらんで枝を適当にはらい、ボンゲ・ファイを吊し、枝の影から火をつける。首尾よく高く上昇すれば、村人すべてが歓喜の声を発して跳びあがる。そしてフォーン・ラムの拍子をとるケーンの音が一段とたかく響きわたる。ケーンは芦竹を幾本か張合わせてつくった楽器であって、口で吹くが、オルガンに似た音を出す。ケーンはモー・ラムやフォーン・ラムになくはならぬ楽器であり、韻律の美しいものとして村人達に喜ばれている。

ところによってはボンゲ・ファイの日に村の若者達の得度式が行なわれる。村では一人一人だと費用もかさむので、村中の幾軒かの家が寄合って一度に行なうことがしばしばである。この場合、得度式はボンゲ・ファイの前日に行なう。今年は12人の青年が出家し



写真6 フォーン・ラム、楽器はケーンと太鼓



た。そのうち4人はすでに還俗し、8人が寺に残っている。

## 7 親睦のしるし

帰国の日もしだいに近づいている。やってみたいと思うことはいろいろとある。しかし、またとない機会であるから、時間のあるかぎり、できるだけひろく、そしてつまらぬことでも確実にしておくように心掛けている。

帰りの日が近づくと「いつ帰るのか」「今度はいつくるのか」「写真をおいといてくれよ、妻や子供のも一緒に」という声が聞こえる。バンコクまで送って行きたいという者、宛名付きの封筒を要求する者などもある。きっと息子の得度式、娘の結婚式に来てくれという知らせを送ってくることだろう。あるいは田植の手間を乞う手紙かもしれない。「マー・ソイ・ガン・ガン・ドゥー」という相互扶助を頼む言葉が、親近感とともに耳の奥から聞こえてくる。

実際に調査をした1年余りの間、村の人はつねに友好的であったし、開けばなしにいろいろと調査に、あるいは雑談に応じてくれた。またその間、物を強請するということもなかった。ときには写真を撮ってくれと要求したり、また菓をいろいろと求めたりすることはあったけれども、それは互によく知り合った間柄であるからで、一度も不快な感じを受けたことはなかった。ただ物をあたえても「ありがとう」などという言葉はほとんど聞けなかった。はじめは不作法だとも思ったが、これも村という狭い空間で、顔をつきあわせての生活状況では、むしろ親しさを示すもの、「ありがとう」などといわれれば、かえって他人行儀の感じがする。やれば喜ぶし、相手が喜ばばこちらも嬉しい。滞在中に多くのサーマキーがこの村にできた。そのサーマキーの印として、愛用のオートバイは今年から開かれる村の保健所に寄贈することにした。

(6月25日 コーンケンにて)

## NASAKOM から AMPERA へ

—インドネシア現地報告—

神 谷 不 二

### 1

わたくしの調査旅行は2月5日から6月16日まで、約4カ月半。このうち6週間は某財団の好意によって中近東諸国で費したものであり、東南アジア諸国で過した期間は約3カ月であった。この滞在期間は当初の申請予定をだいぶ上廻っている。その理由は、ありていにいって、2, 3の国で外貨の実勢レートによる恩恵を受けたからである。反面、かぎられた予算でなるべく長く現地に滞在するため、節約にも相当留意した。ジャカルタで、ほとんどの外国人が泊るホテル・インドネシアを避けて、そのとなりのウスマ・ワルタ(プレス・ハウス)に泊ったのは、その一例である。後者には前者のようにエア・コンディショナーもなく、調度などもすべて見劣りしたが、住めばけっこう都であった。その証拠に、わたくしがそこへ住むようになってから、各新聞社の特派員たちがつきつぎとホテル・インドネシアからウスマ・ワルタへ引越してきて、わたくしが帰国するころには、ホテル・インドネシアに居をかまえる日本人記者は皆無になってしまった。

旅行中および帰国後に、わたくしはすでいくつかの現地報告を書いた。それらを念のため下に列挙する。いずれもあまりまとまりのないものだが、現地での印象や実感を卒直に伝えようとしたものであることはたしかだからである。

「ベトナムの顔」朝日新聞・大阪版・3月12日

「ベトナム感傷の旅」毎日新聞・大阪版・3月21日

「ネールの幻想」毎日新聞・大阪版・5月16日

「“物情騒然”—ジャカルタの街角で」朝日新聞・大阪版・5月25日

「スカルノ体制のラスト・ページ—インドネ